

いわき湯本病院

症例概要

患者:80代 女性

病名:右足関節外果骨折術後、ラクナ梗塞、脊柱管狭窄症、認知症

入院期間:令和2年10月初旬～令和2年12月初旬

経過:自宅で夫の介助下で生活していたが、9月下旬トイレに行こうとして転倒。右足関節外果骨折の診断で手術的に整復固定術が行われた。急性期病院では既往にラクナ梗塞、脊柱管狭窄症、左眼網膜中心動脈閉塞による失明があり、自立歩行獲得は困難と説明され術後リハのため紹介され当院入院。来院時、ほぼ全介助で呼びかけには時折返答する程度で食思不振強度、摂食困難であり経鼻経管栄養で管理する状況に終始した。入院後約1ヶ月目急激に応答が明瞭になり、経口摂取10割が可能となってリハが進み入院2ヶ月目には理解力も改善され施設に退院できた例。

内容

既往にラクナ梗塞、脊柱管狭窄、左目網膜中心動脈閉塞による失明などがあり、これに認知症も加味されて、ADLも低下気味で、自宅で夫の介助で生活していた。令和2年9月下旬トイレに行こうとして転倒、歩行困難になり救急病院に搬送。右足関節外果骨折と診断され手術的に整復固定術が施行された。

術後7日目からリハが開始されたが、急性期病院では既往に認知症、ラクナ梗塞、脊柱管狭窄症などもあり、自立歩行の獲得はまず困難で、術前までの状況に回復するのは無理であろうとの説明で、追加リハビリのため術後19日目に紹介され転院してきた。

来院時の状況は、運動能力はほぼ全介助で、呼びかけには時折返答する程度であった（FIM運動項目16点、認知項目10点合計26点）。転院時から食思低下が著明で1割から3割程度にとどまっていた。

入院1週目頃になって摂食不能になり、意識レベルも低下さらには頻脈、不整脈が出現し入院2週目には経鼻経管栄養による管理が必要な状況になった。ADLは低下しこの時期のFIMは運動項目13点、認知項目5点合計18点で入院時より低い状況に至った。

入院3週目から4週目にかけて頻脈の程度はやや落ち着き始めたが運動能力はなお全介助で定期的な車椅子への移乗はなお困難であった（運動項目14点、認知項目7点合計21点）。

入院4週目を過ぎた11月中旬頃から問いかけに対して返答が明瞭に見られるようになり、1日1食ミキサー食での経口摂取を開始した。この頃から、理解力が急激に回復し、経口摂取も進みそれに伴って運動訓練も進みADLも上昇傾向になった（入院6週目のFIMは運動項目28点、認知項目14点合計42点）。全介助が必要であった更衣、ベッド、トイレ移乗も中等度介助で可能になり、理解力、コミュニケーション能力も向上がめざましく入院約2ヶ月目施設への退院になった。

全介助状況で転院してきたが、認知能力、意識障害などが急激に改善するに至って経口摂食が可能になり、リハも進展して施設での生活に移行できた症例。